

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592522

研究課題名（和文） 遺伝診療部門における遺伝専門看護職の職種間および施設間連携における役割とその構築

研究課題名（英文） Construction of the role in cooperation between occupations of nurse specialized in genetics and between facilities in medical genetics

研究代表者

横山 寛子 (YOKOYAMA HIROKO)

東海大学・健康科学部・教授

研究者番号：30143150

研究成果の概要（和文）：近年、遺伝医療は急速に発展を遂げ、遺伝診療部門を開設する施設が急増したことから、遺伝専門看護師への役割に期待が寄せられている。そこで、チーム医療を原則とする遺伝医療における、遺伝専門看護職の職種間連携や施設間連携の実態について把握し、遺伝専門看護職の今後の役割を構築するための一助となるための調査を行った。

研究成果の概要（英文）：Recently genetic service has achieved rapid development, and facilities that have established department of medical genetics have increased sharply, which results in expectation to role of nurse specialized in genetics. Therefore investigation was carried out to grasp actual condition of coordination between occupations of nurse specialized in genetics and cooperation between facilities in medical genetics whose principle is team treatment, and to help construct future role of nurse specialized in genetics.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：遺伝専門看護師、遺伝相談、遺伝診療部、遺伝カウンセリング、職種間連携

1. 研究開始当初の背景

1990年より始まったヒトゲノムプロジェクトによる研究は、遺伝医療に急速にシフトし1999年の信州大学医学部附属病院の遺伝子診療部の開設を皮切りに、現在130以上の遺伝医療相談部門が設置されている。1995年にWHOより示された「遺伝サービスのためのガイドライン」では、遺伝相談に関わる専門スタッフの養成が提唱された。我が国でも厚生科学審議会先端医療技術部会で「遺伝医療」充実に向けての教育等が取り上げられ、

日本人類遺伝学会、日本遺伝カウンセラー学会および日本遺伝看護学会を中心として、そのカウンセリングのありかたについての検討が行われたている。看護領域については、遺伝専門看護師の専門的役割について、有森¹⁾らが「看護職に求められる遺伝看護実践力—一般看護師と遺伝専門看護職の比較—」の研究において遺伝専門看護職の能力についてまとめているが、出生前診断に関する看護職の実践力を具体的に示してはいない。そこで、実践的看護職の遺伝診療部門における機

能について平成18年度～21年度の科学研究補助による研究では、出生前診断にスポットをあてその実践的機能について調査を実施した。その結果は、遺伝診療部門への看護職の参入状況は平成11年度の15.6%から37.0%と大幅に増加がみられた。しかし、看護スタッフの位置づけは、遺伝診療部門の専属スタッフではなく、遺伝診療グループの他職種との連携も63.1%が取りにくいと評価していた。また、遺伝診療部門のシステムはそれぞれの施設で異なっており、マンパワーの面でもかなりの格差が認められた。このように、遺伝診療部門および看護職の参入共に増加しているが、それぞれの施設で多くの問題を抱えているのが現状のようである。

そこで、本研究グループは、前回に引き続き遺伝相談件数で最も多い出生前診断を軸にして、遺伝専門看護職の実践的機能のさらなる構築を図ると共に、チーム医療を原則としている遺伝医療における他職種間の連携および他施設間の連携にスポットをあて、その問題点を明確にしながらか出生前診断における遺伝相談のケアの質の向上を図ることを目標にしたいと考えた。

2. 研究の目的

より良い遺伝相談が行えるように、遺伝診療部門における看護職の役割の構築を図るために以下の実態を把握することとした。

(1) 遺伝診療部門における遺伝医療システムの現状と職種間連携および関連施設との連携状況について明確にする。

(2) 出生前診断に関する遺伝相談にスポットをあて、遺伝診療部門内の職種間連携および関連領域との連携及び看護職間の連携の現状について明確にする。

3. 研究の方法

(1) 第一段階：全国遺伝診療部門のシステムおよび人的配置に関する調査

①調査対象および方法：全国遺伝相談施設リストよりHPにアクセスして、遺伝診療部門の情報収集を行う。②調査期間：2012年2月1日～3月10日③分析方法：収集したデータを整理し、人的配置および看護職の機能・役割について分析を行う。

(2) 第二段階：全国の遺伝診療部門での出生前診断に関する、診療部門内の職種間連携および他部門との連携、さらには看護職間連携の現状を把握する。

①調査対象及び方法：全国遺伝相談施設126施設を対象として調査を実施した。②調査用紙の作成：先行調査および先行研究を参考にしながら、調査者が独自の質問紙を作成した。調査項目は、以下の内容である。また、医師、看護職別に調査用紙を作成する。

<医師用>対象者概要、対象施設の遺伝相談

関連部門の概要、遺伝相談関連部門内でのチーム連携、出生前診断実施状況、出生前診断における施設間連携、出生前診断相談のプロセスにおける職種の役割、今後の看護職に期待する出生前診断相談における役割期待<看護職用>対象者概要、対象施設の遺伝相談関連部門の概要、遺伝相談関連部門内でのチーム連携、出生前診断実施状況、出生前診断における施設間連携、出生前診断相談のプロセスにおける職種の役割、出生前診断相談における看護職の役割

③調査期間 2012年2月10日～3月15日

④分析方法 調査用紙のデータは解析ソフトSPSS (Ver15.0) を用いて分析を行った。

⑤倫理的配慮：東海大学健康科学部倫理審査委員会の承認を得ると共に、返信をもって調査協力の同意とした。

4. 研究成果

(1) 全国遺伝診療部門のシステムにおよび人的配置に関する調査

HPによる遺伝診療部の所属スタッフ数は、医師のみ54.7%、医師と認定遺伝カウンセラー17.2%、医師と看護職17.2%、医師・看護師・認定遺伝カウンセラー10.9%と半数の施設は、医師のみでの診療であった。また、その診療領域は、病院によって偏りがあり、総合的な遺伝診療部門としての開設を行っている施設は、極めて少なかった。また、HPにスタッフ数や診療領域を具体的に提示している施設は、全国の遺伝診療部門の約半数の64施設であった。

(2) 出生前診断に関する、診療部門内の職種間連携及び他部門との連携、さらには看護職間連携の現状

①対象の属性：医師49名、看護師23名から回答を得ることができた。看護職の回答率が低かったのは、専属のスタッフとしての所属が少なかったことと思われる。その属性は、遺伝相談の経験年数は、医師は14.2年、看護師は3.9年で、医師は産婦人科医・小児医が多く、看護職は看護師と助産師が半々であった。

②遺伝相談チームのスタッフ構成：医師は1名から20名とかなりの幅があったが、数名の所属が7割弱であった。看護職が参入している施設は42.9%であり、所属数は1～4名でした。看護職の参入については、1999年の調査(2.9%)の15倍と大きな増加がみられた。しかし、1名とする施設が24.5%、2名以上の複数名の施設は、18.4%と少ない状況であった。さらに、医師のみで出生前遺伝相談を行っている施設が、全体の37.0%であったことから、現状の遺伝相談のスタッフ構成は、チーム医療によるカウンセリングが十分に展開されているとは言い難い状況した。

③看護職の所属状況(図1)：看護職の所属

は、外来所属が 50.0%と最も多かったが、遺伝相談門での看護職の位置を医師と看護職の回答を比較してみたが、同様の傾向があり、「遺伝相談部門の専属であるため、相談業務を優先することができる」と回答した者は、看護師 (21.7%) 医師 (12.2%) で、「専属でなく相談業務を優先することができない」との回答が看護師 (39.1%) 医師 (53.1%) と多く、看護職の相談業務を優先している施設は少なかった。この結果は、2009 年に行った調査結果と同様で、遺伝相談部門専属の看護職を配属している施設は増加していなかった。

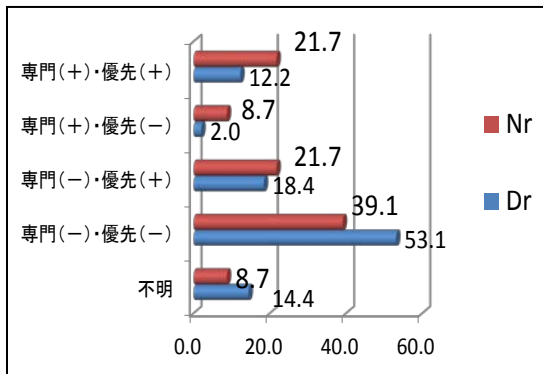


図1 看護職の相談業務の位置づけ

④チーム連携 (図2) : 遺伝医療におけるチーム連携にとって重要となるのが、チームメンバーでのカンファレンスであるが、その参加状況について確認してみた。事前カンファレンスの開催状況は、「必ず」あるいは「ケースによって」開催していると回答した施設は、51.0%であった。そのカンファレンスへの参加状況を職種別にみると、医師が最も多く、次に看護職で、その参加比率は 58.3%と看護職が参加していない施設も約半数あった。これは、所属との関連もあり、優先業務でないことから、カンファレンスへの参加が困難な状況であるとも推測された。

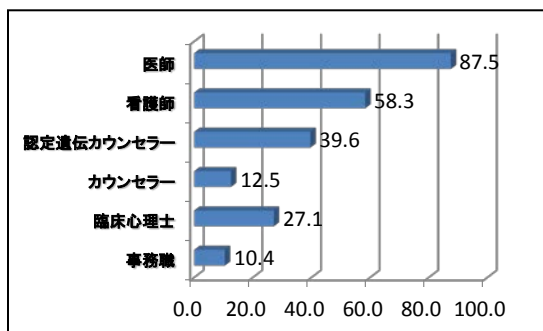


図2 チームカンファレンスへの参加状況

⑤職種間連携 : 看護職と医師との連携について (図3) 医師の認識は、「専属のスタッフであり、遺伝相談についての十分に連携はとれている」とした者は 2.6%と極めて少なく、

「専属のスタッフではないが、遺伝相談があればその職務が優先されるため十分に連携がとれている」と認識している者は 25.6%で、「看護職との連携が取れている」と認識している医師は、3割弱であった。

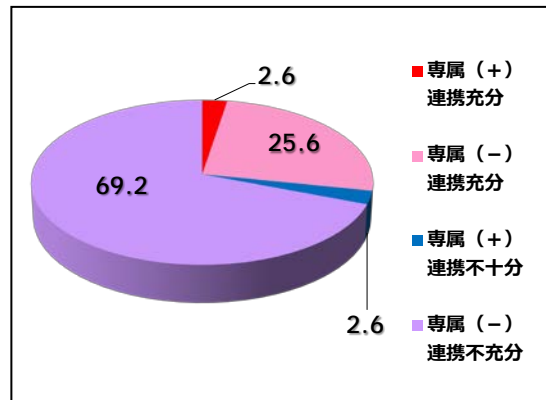


図3 看護職との連携に関する医師の認識

⑥医師と看護職の項目別役割の分担状況 (図4-1、4-2) 出生前遺伝相談の項目別の担当状況について、医師と看護職の両者に回答を求めた。以下、図は医師の回答を示すが、回答の傾向はほぼ一致しており、「相談者およびその家族の事前情報収集」および「初回面接における相談理由の情報収集」については、看護職が担当している比率が他の項目より高率であったが、「検査直後の過ごし方とその後の日常生活の送り方への説明」以外は、いずれの項目も医師の担当比率が高かった。相談者のニーズの把握にとって重要となる家系図の作成や相談内容の整理については、看護職の回答においてもその担当は 2~3 割程度であった。看護職の主な役割は、検査当日の確認・検査介助・終了後のケアであるとの回答していた。その後の検査結果の告知や告知後の事後相談への看護職の関わりは、医師・看護職ともに 1 割程度であったが、「出生前診断結果告知後のフォローアップについては、約 3 割が看護職の担当と回答していた。しかし、少数ではあったが、告知以外のすべての項目を看護職が担当している施設もあった。

調査では、以下のことが明らかとなった。

- ・看護職の部門への参入状況は、42.9%であったが、部門専属で相談業務が優先されているのは、1~2 割程度であった。
- ・チーム連携に必要なカンファレンスへの看護職の参加状況は、半分以上の参加を含めて 34.7%であった。
- ・相談業務での看護職との連携について、連携がとれていると認識している医師は、25.6%であった。
- ・出生前遺伝相談での看護職の介入は、施設により差があったが、主たる担当は、初回面

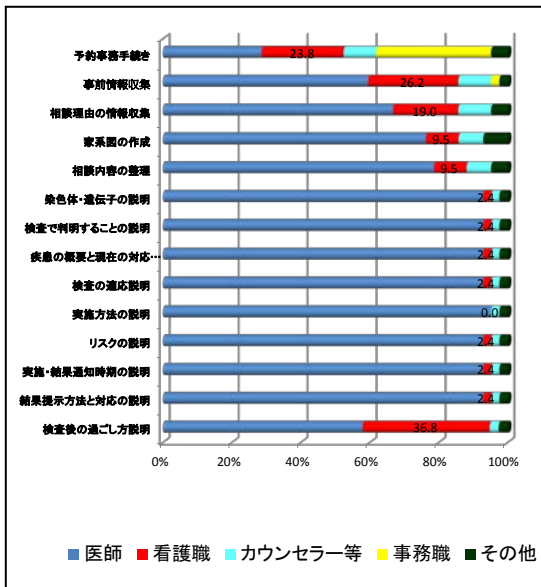


図 4-1 出生前遺伝相談の項目別担当状況

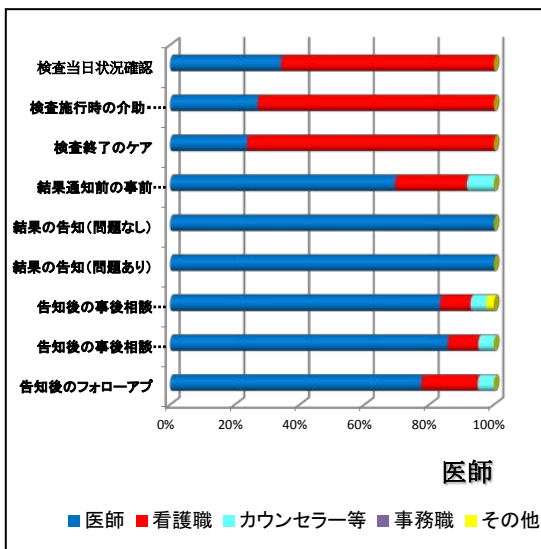


図 4-1 出生前遺伝相談の項目別担当状況

接時の対応と検査前後のケアであった。

遺伝診療部門の急増に伴い、看護職の出生前遺伝相談への介入も明らかに増加していたが、その配属は遺伝診療部門への専属勤務ではなく、兼務での相談業務であることから、その専門性を十分に発揮できてうる状況とは言い難い現状であった。さらに、チーム医療を原則とする遺伝相談において看護職が担うべき相談者の思いへの共感や自己決定に向けた支援などが、充分に行えていないのが現状であった。

遺伝診療部門のシステムは各施設で異なっており、特にマンパワーの面からもかなりの格差が認められたことから、各施設のシステムを共有し、それぞれのスタッフの役割を明確にしなが、看護者の参入の拡大を図っていくためには、何が必要なのかを今後さらに分析することが重要である。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 1 件)

①横山寛子、石井美里、辻恵子、森屋宏美、溝口満子、出生前診断における遺伝看護職のチーム医療における現状、日本遺伝看護学会学術大会、2012年9月28日、清泉寮(山梨)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 寛子 (YOKOYAMA HIROKO)
東海大学・健康科学部・教授
研究者番号：30143150

(2) 研究分担者

石井 美里 (ISHII MISATO)
東海大学・健康科学部・准教授
研究者番号：10276660

(3) 研究分担者

辻 恵子 (TUJI KEIKO)
東海大学・健康科学部・講師
研究者番号：30338206

(4) 研究分担者

森屋 宏美 (MORIYA HIROMI)
東海大学・健康科学部・助教
研究者番号：80631845

(5) 研究分担者

溝口 満子 (MIZOGUCHI MICHIKO)
秋田日本赤十字看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40149430